

## 演題：児童生徒の歯・口腔疾患に対する最新情報

鶴見大学歯学部小児歯科学講座

朝田芳信

### 抄録

学校における歯・口の健康診断では、従来型の齲蝕や歯周疾患のスクリーニングに加え、口腔機能の評価や軟組織疾患、新たな疾病への対応が求められる時代となりました。今回の講演では、①第一大臼歯の萌出開始時期が30年前に比べて、大きく変化したことに触れたいと思います。日本小児歯科学会の報告では、上下顎の第一大臼歯で萌出開始時期が遅くなり、とくに上顎では6~7か月ほど遅れています。そのため、咀嚼機能、齲蝕および歯列・咬合の発育に問題が生じる可能性が高いといえます。②第一大臼歯と切歯に局限して発症する原因不明のエナメル質形成不全(MIH)ですが、初めは白濁や黄褐色の変色としてエナメル質表面に認められますが、萌出後対合歯と接触するなどして広範な歯質の実質欠損を招くことが少なくありません。口腔環境が比較的良好でありながら、第一大臼歯だけに重症化した齲蝕が認められることは日常臨床でも経験することです。学校歯科健康診断においても、切歯や第一大臼歯の診査にはとくに注意を払って頂きたいと思います。様々な臨床的特徴があり、第一大臼歯のエナメル質形成不全に気付いたら、他の第一大臼歯と切歯を詳しく調べる必要があります。また、通常では齲蝕に罹患しないと考えられる切歯の歯頸部以外の唇面、臼歯では小窩裂溝や歯頸部、隣接面以外の歯面が好発部位となります。③治療薬が開発され注目を集めている低ホスファターゼ症に対する歯科医師の役割と対応についてです。低ホスファターゼ症とは、ALPL 遺伝子の変異によりアルカリホスファターゼ (ALP) 活性が低下し、全身に重篤な症状を引き起こす疾患です。ALP 活性低下に対する酵素補充療法(ストレンジック®)が可能となったことで、早期発見・早期治療の重要性が高まっています。特徴的な症状の1つとして、早期に乳歯脱落が脱落するため、歯科受診が診断の契機となるケースがあります。下顎乳前歯部の早期脱落が特徴ですが、永久歯においても、咬合状態や歯周疾患への罹患状況によっては、早期脱落がみられると報告されています。④口腔機能発達不全症に対する評価とその対応についてですが、現在、日本学校歯科医会では、「口腔機能発達不全症に関する調査研究委員会」を立ち上げ、幼稚園・就学時・小学校及び中学校での健康診断を行う学校歯科医が「口腔機能発達不全症」の児童生徒をどのように評価し、かかりつけ歯科医との連携をどのように図るべきなのかを検討しています。令和2年の診療報酬改定において、診断基準や算定方法が改訂されましたので、その内容についても触れさせていただきます。